

して誕生する時期に、その冒頭に位置する人物である。本書は、ラクタンティウスの意義を再提起するに相応しい力作であると言えるだろう。

Stephen M. Hildebrand

*The Trinitarian Theology of Basil of Caesarea:
A Synthesis of Greek Thought and Biblical Truth*

Washington, D. C.:

The Catholic University of America Press, 2007, pp. vi + 254

土 橋 茂 樹

本書は、現在ステューベンヴィル・フランシスカン大学神学部の准教授である著者が2002年にフォーダム大学から博士学位を取得した際の学位論文「カイサレイアのバシレイオスの三一神学における用語上の功績と聖書解釈」をもとに、大幅な加筆修正を経て刊行されたものである。本書を一言で評するなら、カッパドキア三星の先陣として、ニカエア公会議以降の教義論争の荒波に立ち向かったバシレイオスの浩瀚な著作群に取り組み、彼の三一神学の全体像を丹念に纏め上げた労作と言い得るだろう。

振り返れば、バシレイオス没後1600年を記念した国際シンポジウム（1979年）の全容がP. J. Fedwick編集の2巻本として1981年に公刊されて以降、バシレイオス研究は新たな時代を迎えたと言ってよい。たとえば、バシレイオスの伝記として、R. T. Smith（1879）、W. K. L. Clarke（1913）以後の空白を埋めて余りあるP. Rousseau, *Basil of Caesarea*（1994）、三一神学史における従来のバシレイオス理解に修正を迫るH. -C. Brennecke, *Studien zur Geschichte der Homöer*（1988）やL. Ayres, *Nicaea and its Legacy*（2004）、さらにバシレイオス三一神論研究における金字塔B. Sesboué, *Saint Basil et la Trinité*（1998）など、既に定評のある研究書に限っても枚挙にいとまがないほどである。こうしたリストの中に本書を置いてみるならば、確かに英語圏において待望久しいバシレイオス三一神

論研究書ではあるものの、その主張が先行研究の穏当な取り纏めの域を越えることは思いのほか稀である。長年にわたる錯綜した論争史をコンパクトに鳥瞰していく著者の手腕は、バシレイオスの思想形成過程を鮮やかに輪郭づける利点をもたらすものであることは間違いないが、その反面、論争による哲学的理解の深まりに分け入り従来の解釈史の更新を訴える有力な主張に対しては殊のほか冷淡（あるいは無関心）であり、敢えて言えば解釈の平板化という弊害さえ生み出しかねない。その点を明らかにするためにも、まず本書の構成から見ていきたい。

第1章ではバシレイオスの生涯と仕事が概観される。本書を理解する上では非常に簡便で役立つ記述だが（詳細な伝記ならば上記 Rousseau が必須）、バシレイオス研究のアキレス腱ともいえる年代画定問題について、せめて、年代画定に不可欠な資料である書簡集の最新の独語訳者 W. -D. Hauschild が提唱した新たな年代設定には言及すべきであったろう。

続く第2章では、まず最初に、本書を一貫するバシレイオス三一論の用語法から見た四段階の発展過程が提示される。それはすなわち、(1) 相似本質派時代^{ホモイウーシアン}（360年頃～65年頃）、(2) 同一本質派への移行期^{ホモウーシオス}（365年頃～72年頃）、(3) 位格を表現するためにギリシア語「プロソーボン」を用いた時期（372年頃）、(4) 位格を表現するためにギリシア語「ヒュポスタシス」を用いた時期（375年頃～379年）、以上の4段階である。このうち、第1段階の説明に当てられる第2章では、この時期に書かれたラオディキアのアポリナリオス宛て書簡 361 や『エウノミオス論駁』において「ウーシアにおける相似」(*homoios kat' ousian*) という相似本質派固有のフレーズが用いられていることを論拠に、著者はバシレイオスがこの期間に相似本質派に与していたと解する。この点で重要なのは、この時期にはウーシアとヒュポスタシスの語義区分がまだ不明確で、ほぼ同義的ださえあったという論点である。では、一体なにゆえに、また如何にして、バシレイオスは親ニカイア派に転向し、キリスト論において〈父〉と〈子〉^{ホモウーシオス}の同一本質を擁護するようになったのか（第2段階）、あるいはまたウーシアとヒュポスタシスの語義区分を明確化していくようになったのか（第3・4段階）。その点の解明が第3章において、各段階に典型的なテキスト（書簡、講話、『聖霊論』）の箇所を挙げて非常に見通しよく纏められる。しかし、扱われるテキストの選別、解釈ともに有力な先行研究の要約といった感は免れない。そもそもバシレイオスを相似本質派から同一本質派へと転向させた動機は何なのだろうか。著者は書簡の

やり取りを題材に、影響を与えたとみなされ得る特定の要素を慎重に消去していきつつ、バシレイオスのテキストに見出される用語頻度の変化のみを事後的に同一本質派への転向の証左として提示するとどまる。その禁欲的で堅実な解釈姿勢は評価できるが、哲学的により一層踏み込んだ議論を期待する向きにはいささか物足りない論述である。しかも、この論点を扱うには今や避けて通れない（上記の）Brennecke をまったく参照していないのは極めて遺憾である。同様に、第3・4段階、すなわち「プロソーボン」から「ヒュポスタシス」への用語交替を介してウーシア・ヒュポスタシス間の語義区分確立へと至る過程を、サベリオス主義への反論のみを論拠にして説明する点、また372年頃になされた講話24の用語法のみによって第3段階とみなす点、そうしたところに著者の語彙中心的でやや表層的なテキスト解釈の方法論的問題があるように思われる。

しかし、本書後半部（第4章～第6章）に入るや、個々の論述が俄かに生彩を放ち出し、伸びやかに躍動し始める。後半部の統一主題は、バシレイオスの三一神論において聖書解釈が果たす重要な方法的意義の証示にある。第4章では、まずバシレイオスに見出される聖書解釈法について、たとえば初期には多用されたアレゴリーの解釈が『ヘクサエメロン』のような後期著作では影をひそめるというようにして、相異なる局面として識別され、特徴付けられていく。続く第5章では、実際に自らの三一神論の明確化のために、彼がどのように聖書解釈を用いるか、その具体例として三つの枢要箇所（ヨハ14:9、17:26、マタ11:27）について考察がなされる。たとえば、〈父〉なる神が〈子〉キリストを「生む」ということを説き明かすために、バシレイオスはヨハ14:9の解釈を用いている。すなわち、〈父〉なる神が自らの命と本質をもって自らの像たる〈子〉となすが故に、〈子〉は〈父〉の栄光の全き光となり、その結果、〈子〉を見る者は〈父〉を見ることになる（ヨハ14:9）、といった具合である。同様に第6章では、バシレイオスの聖霊論における聖書解釈の役割が、1コリ12:3の解釈を用いて説明される。

いずれにせよ、本書を一読して明らかなことは、本書における著者の最大の関心が、もっぱら三一論的文脈でのバシレイオスによる聖書解釈に向けられていたのであり、ギリシア思想にはなかったという点である。確かにバシレイオスにおいて、ギリシア出自のバイディアは重要な役割を演じていたが、それはあくまでも聖書的真理に与るための手段に過ぎなかった、というのが著者の大前提である。したがって、「ギリシア思想と聖書的真理の総合」という本書の副題は、構

成的に見れば、前半部（第1章～第3章）と後半部（第4章～第6章）の対比として明らかなものの、実質的にはいささか皮肉に聞こえかねない。なぜなら、本書において「ギリシア思想」とは、ギリシア的語彙と用語法の再編に他ならないからである。このような著者のスタンスが、「ギリシア思想と聖書の真理の総合」に本来不可欠なはずの論点、たとえば、不可知な神の本質に各位格の固有性の認識を介して限りなく漸近するというバシレイオス特有の方法論的主張と神の^{ウーシア}本質の可知性を主張するエウノミオスとの間に横たわるストア的エピノイア論の問題、近年 M. Barnes が精力的に論じている「三つのヒュポスタシス、一つの^{デュナミス}力」の問題、さらにそのようなデュナミス論には不可欠なプロティノスからの影響問題、こうした諸論点の軽視ないし無視をもたらしたと言っても過言ではないだろう。

以上、批判的コメントに終始してしまったが、それにもかかわらず、冒頭に掲げた「バシレイオスの三一神学の全体像を丹念に纏め上げた労作」という私の評価はいささかも揺るぎはしない。カッパドキア三教父の著作群を収録した *Patrologia Graeca* 10 巻分 6000 コラムの内、4 巻 2500 コラムを占める大バシレイオスの多様で複雑な姿を読み解くことは、本書のように穏当な読み筋を過不足なく集成し、細部にまで配慮の行き届いた研究書の手引きなしには極めて困難だからである。

Martin Rhonheimer

The Perspective of the Acting Person:

Essays in the Renewal of Thomistic Moral Philosophy.

Edited with an introduction by William F. Murphy, Jr.

The Catholic University of America Press, 2008, xxxix + 329 p.

井 上 淳

著者の Martin Rhonheimer (マルティン・ロンハイマー) は 1950 年スイスの